



清末から中華民国初期の内モンゴルにおける近代学校教育の展開と知識人の輩出ーハラチン地域と帰化城トゥメド地域の事例を中心にしてー

阿如汗

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2018-03-25

(Date of Publication)

2020-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7227号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007227>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文要旨

氏 名 アローハン（阿如汗）

専 攻 文化相關専攻・アジア・太平洋文化論コース

指導教員氏名 萩原 守教授

論文題目（外国語の場合は日本語訳を併記すること）

清末から中華民国初期の内モンゴルにおける

近代学校教育の展開と知識人の輩出

ーハラチン地域と帰化城トゥメド地域の事例を中心にしてー

論文要旨

本研究では、清王朝末期から中華民国初期にかけての転換期の内モンゴルにおいて、近代的な学校教育がどのように開始・展開されたかという実態を明らかにした。そしてその解明作業を通して、内モンゴルにおける近代的な学校教育がその後の知識人輩出にどのようなつながっていったのか、またそれが内モンゴルの近代史にいかなる影響を及ぼしたかなどの諸問題を検証することを、本研究の最終的な目的とした。

要するに、清王朝によるモンゴル統治の転換期とともに到来した「近代化」の過程で、内モンゴルのモンゴル人が教育の面において、どのような体験をしてきたのか、近代化のためにどのような努力をしてきたのか、そしてどのような問題に直面したのか、という近代化の過程で生じた歴史の復現を試みたものである。この内モンゴルの教育史に関して、本研究では、その各地域に各々の特徴が存在することを想定した上で、最も先進的であったはずのハラチンと帰化城トゥメドという2つの地域を選んで比較しつつ、学校教育が近代化の一環として内モンゴルにどのような形で導入されたのかという問題を検討した。

第一章では、清末の内モンゴルにおける近代学校教育導入の時代背景を、先行研究に拠

りつつ概説した。清王朝政府はその末期に、列強の侵略や国内の反乱に苦しみ、莫大な賠償金を負担させられて財政困難に陥った結果、近代化を求めて変法の詔を發布した。こういう状況下で、モンゴル人王公グンサンノルブは、漢人の入植やそれにとまなう金丹道暴動、そして義和団事件といった激動の時代を経た後、近代化への改革を試み始めた。また、清末において、清王朝政府が教育改革を行って日本式教育を導入し、それに伴う日本留学を通して革命思想を身に付けた漢人知識人たちが結果的に中華民国を成立させるに至った。こうした時代背景の下で、外藩モンゴル地域においては最初にグンサンノルブが、そして内属モンゴル地域においては満洲人旗人官僚が、それぞれ近代的学堂の創設を内モンゴルで進めていたことを解説した。

第二章から本論に入り、まずハラチン右翼旗の王公グンサンノルブによる清朝末期の近代化改革の象徴として知られる守正武備学堂に、日本陸軍軍人の伊藤柳太郎が教官として招聘された事例を取り上げ、その歴史的背景と経緯を論じた。主に Web 上のアジア歴史資料センターで掲示されている防衛省防衛研究所図書館所蔵資料、そして新聞記事、哈爾浜で刊行されていたモンゴル語新聞「モンゴリン・ソニン・ビチク」等の史料を用いて、グンサンノルブの学堂設置を、日本陸軍による諜報活動という側面と、ハラチン右翼旗内部の反応という二つの側面から論じた。

第三章では、清末の内モンゴル・ハラチン地域における「近代的学校教育」創設の背景と運営の実態を明らかにするとともに、それらの学校教育がモンゴル社会の近代化にどの程度貢献したかという問題を検討した。その際、中国第一歴史档案館、遼寧省朝陽市ハラチン左旗モンゴル族自治州档案局の档案史料を用いて検討した。

第四章では、清末、新政下の内モンゴル帰化城トゥメド地域におけるモンゴル人向けの近代学堂の設立・運営の具体相を考察した。帰化城トゥメドには、世襲旗長が置かれず、旗民は理藩院から直接派遣されてきた旗人官僚である都統や副都統たちによって管理されていた。この章では主に、中国第一歴史档案館所蔵の档案史料や内モンゴル自治区（帰化城）トゥメド左旗档案局所蔵の档案史料を用いて、満洲人旗人官僚がどのような立場からモンゴル人向けの学堂を創設したのだろうかという側面から帰化城トゥメド地域におけるモンゴル人向けの教育問題を論じた。

第五章では、中華民国政府が発足してまもなく創設された「辺境」地域向けの学校であ

る蒙蔵学校を対象にして、その創設の背景と経緯を明らかにした上で、その基本的な性格について検討した。この章では主に、日本の外務省外交史料館、北京市档案馆、遼寧省朝陽市ハラチン左旗モンゴル族自治県档案局などの档案を用いた。そして、蒙蔵学校はモンゴル、チベット、青海、新疆といったモンゴル人、チベット人、ウイグル人の居住地域から蒙、蔵、回三民族の学生を募集し、その上に漢、満両民族の学生を入学させるといった「五族」を対象に開設された学校であり、中華民国臨時政府が組織した拓殖協会や、それに続く五族国民合進会などが、モンゴル、チベット、青海、新疆といった蒙、蔵、回各民族の居住地域を開拓して、現地権力者と連合するための手段として各種組織を作り上げる目的で、学校創設に至ったことを検討した。

第六章では、蒙蔵学校が創設されて間もない頃の初期の学校運営の実態を明らかにした。そしてそれを通して、初期の蒙蔵学校において、いかなる教育が行われていたのかという問題を、主に台湾国史館所蔵史料と『和美歲月』編委会 2013『和美歲月—中央民族大学附属中学校史 1913-2013—』所収の諸史料を用いて検討した。また蒙蔵学校を中華民国の数々の学校の中でどう位置づけるべきかという問題も検討した。

終章では、本研究の結論をまとめ、今後の課題を述べた。

論文審査の結果の要旨

氏 名	アローハン（阿如汗）		
論 文 題 目	清末から中華民国初期の内モンゴルにおける 近代学校教育の展開と知識人の輩出 ーハラチン地域と帰化城トゥメド地域の事例を中心にしてー		
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
論文チェック ソフトによる 確 認	☒ 確認 ☐ 未確認 理由：		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	委 員 長	教授	長 志珠絵
	委 員	教授	萩原 守
	委 員	准教授	谷川真一
	委 員	東京外国語大 学 名誉教授	中見立夫
	委 員		印
要 旨			
本研究は、清末から中華民国初期にかけて内モンゴル地域で開始された近代的な学校教育の実態を、内モンゴル東南部のジョスト盟・ハラチン地域と、同じく中西部の帰化城トゥメド地域という定住化の進んだ二つの先進地域を事例として、詳細に解明した力作である。			
本研究の最大の特徴は、清末期と中華民国初期における大量の教育関係公文書史料を博搜・収集して、近代的学堂の創設や運営の実態を実証したその手堅さにある。特に史料収集に関して注目すべきは、内モンゴルの内蒙古自治区档案馆、トゥメド左旗档案局はもちろんのこと、遼寧省朝陽市ハラチン左翼モンゴル族自治県、北京の中国第一歴史档案馆、北京市档案馆、さらには台湾の国史館、日本の外務省外交史料館、防衛省防衛図書館に到るまで、各地の古文書館をまさに博搜して、第一級の原典史料を自ら大量に発見してきた点である。公文書で使用されている言語だけをとってみても、モンゴル文、漢文はもちろんのこと、満洲文や日本語を含む多言語を活用している。			

本研究は、序章と終章を除いて計六章からなる。第一章では、清末期に対モンゴル政策の変更からモンゴル民族に危機が訪れるという時代背景を概説する。またハラチンと帰化城トゥメドに注目する理由、教育史に関する先行研究が持つ大きな問題点、本研究で使用する史料等を解説する。

第二章から本論に入る。先行研究で絶賛されてきたハラチン右翼旗旗長グンサンノルブによる学堂創設について、軍人教員を派遣した日本陸軍や地元のモンゴル人が記録した日本語・モンゴル語の原典史料を活用し、グンサンノルブは清朝政府の近代化政策と日本陸軍の大陸工作に安易に便乗する形で教育改革を進めただけであって、彼の近代化改革によって結果的にモンゴル文化はより衰退し、学堂自体も結局わずか数年で消滅してしまったという重要な結論を出した。

第三章では、ハラチン左翼旗における初期の学堂創設事情を検証する。この旗では、隣の右翼旗が導入したような日本風・モンゴル風の学堂ではなく政府の命じた中国風の学堂が創設されたという事実と、右翼旗同様に大変な財政難に陥って旗長たちが苦しんでいたという事実を明らかにした。すなわち日本風の教育は右翼旗のみに存在し、隣接する旗にまでは及んでいなかった。

第四章では、帰化城トゥメド地域における学堂の創設事情を実証している。この旗では地元のモンゴル人王侯ではなく北京から派遣されてきた満洲人旗人官僚が北京政府の要求に応じて学堂を創設したため、上記ハラチン諸旗に比して、完全に中国本土風とも言えるような学堂が創設・運営されたが、その費用をうまく節約捻出したためにその後も継続できたという事実を実証している。

第五章では、中華民国初期の南京政府が拓殖協会を介して計画した拓殖学校と、その後の袁世凱政府が五族国民合進会を介して計画した蒙蔵学校とを研究している。特にそれら諸団体の構成メンバーを詳細に分析し、創設者と見られてきたグンサンノルブとは無関係であることを実証した。

第六章では、北京で創設された蒙蔵学校の実態を詳細に検証する。台湾・国史館所蔵の原典史料に基づいて、初年度の入学者たちが北京周辺の旗人の子弟であったこと、二年目以降の学生が著者の予想通りハラチンと帰化城トゥメド出身のモンゴル人たちであったことを実証し、法律専科・政治経済専科に分かれていたこと、日本や中国の一流の学校で学んだ教師陣の顔ぶれ等を解明した。

本研究は清末・中華民国初期内モンゴルの学堂について、その創設・運営、進学先等を実証的に研究したものであり、教育史について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって、学位申請者のアローハン（阿如汗）は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。（論文チェックソフトによる確認済）

なお、執筆者の業績は以下の通りである。

研究口頭発表 4 回（2014a「日本アルタイ学会」、2014b「国際会議：中国・喀喇沁文化論壇暨札奇斯钦先生生誕 100 周年記念学術研讨会」、2015「満族史研究会」、2017「近現代東北アジア地域史研究会」）

論文 3 点

アローハン 2016a「グンサンノルブによる日本陸軍軍人招聘ー伊藤柳太郎が招聘された経緯と背景ー」『内陸アジア史研究』31：93-117（審査付全国学会誌）

アローハン 2016b「清末の「新政」と内モンゴル・ハラチン地域における「近代教育」の発足ーハラチンの右翼旗と左翼旗の近代学堂創設をめぐる一」『日本とモンゴル』133：32-53（審査付学術誌）

アローハン 2017「清末の内モンゴル帰化城トゥメド地域における近代学校教育の開創・運営ー満洲人旗人官僚によるモンゴル人向け学校教育ー」『日本モンゴル学会紀要』47：1-17（審査付全国学会誌）